

乳房炎部会から

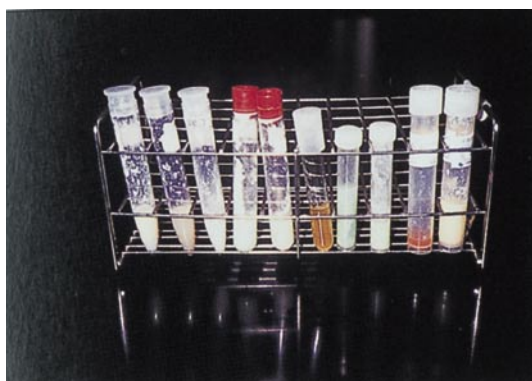
～マイコプラズマ性 乳房炎の発生と その対策～



今回は以前、「乳房炎原因菌を斬る 菌一」のコーナーでも取り上げた「マイコプラズマ性乳房炎」の発生が、最近管内でありましたので、その対策と終息までの経過を取り上げてみたいと思います。

マイコプラズマ性乳房炎について

マイコプラズマ性乳房炎は非常に伝染力が強く、集団発生することから、大きな経済的被害をもたらす疾病として知られています。北海道では1989年にはじめて発生が確認されました。管内では1998年の発生が最初です。道内では1年に1戸程度の発生でしたが、2002年には4戸の発生が確認されており、増加傾向が懸念されています。



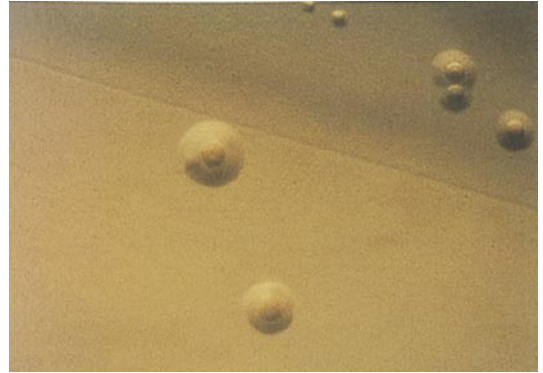
マイコプラズマ性乳房炎の乳汁（非常にブツが多い）

この乳房炎では、健康な乳房が何の前触れもなく急激に腫れてしこりができます。乳汁は多量のブツがあり、水っぽくなることもあります。このような症状

にもかかわらず、診療所で行われている細菌検査ではマイコプラズマを検出できないため「菌なし」となる傾向があります。最初は1分房が発症する場合や、最初から複数分房が同時に発症する場合もあり、乳房のしこりは「ブドウの房状」と表現されることもあります。一般の抗生物質（乳房炎軟膏）による治療で効果がなく、さらに同様の症状が短期間に他の分房にも広がります。ついには乳量は激減し、全く出なくなることもあります。伝染性が強いので、このような牛が1頭、また1頭と増えていきます。マイコプラズマ性乳房炎は発症してしまうと治療法がなく、淘汰するのが最良な選択とされています。

今回の発生農場は、搾乳牛が約 300 頭で 3 回搾乳を行っているフリーストール・パーラー方式の大規模農場です。乾乳後期から分娩前後の牛と、何らかの病気で治療中の牛は別牛舎で飼養し、バケットミルクカーによる搾乳が行われていました。前年度からの乳房炎発症は比較的多く、普及所などによる乳房炎対策が続けられていました。5 月下旬から 6 月上旬にかけて、肺炎など呼吸器症状を示す牛が数頭見られました。

6 月中旬、難治性乳房炎で治療中の 2 頭が泌乳停止したため、マイコプラズマ性乳房炎を疑い、北海道 N O S A I 研修所に検査を依頼しました。結果はマイコプラズマ陽性で、直ちにこの 2 頭を淘汰しました。さらに他の感染牛がないか乳房炎治療牛の乳汁を検査して、12 頭が陽性となり、淘汰



特徴的なマイコプラズマのコロニー（目玉焼き状）

しました。その後、新規の乳房炎牛は、通常の細菌検査と合わせてマイコプラズマ検査を行い、搾乳牛での感染状況を把握するためにバルク乳の検査も行いました。その結果、新規乳房炎牛の 3 頭が陽性、バルク乳も陽性となり、搾乳牛の全頭検査を実施しました。また、北海道 N O S A I 研修所と一緒に搾乳立会を行い、問題点の指摘と改善方法の指導を受けました。

その後も 6 月に乾乳中だった牛がすべて分娩し終わるまで、新規乳房炎牛と分娩牛についてマイコプラズマ検査を行い、バルク乳の検査も毎週 1 回行いました。7 月下旬から 5 回にわたり検査しましたが、陽性となることはなく 10 月のはじめに終息しました。

今回のマイコプラズマ性乳房炎は、これまで北海道内で確認されているものとは少し違い、伝染力が弱い菌種でした。しかし、最終的に 20 頭が淘汰される結果となり、農場にとって大きな損害となりました。

マイコプラズマは子牛などで肺炎や中耳炎（耳下がり）などの原因菌でもあります。この農場でも、発生前に肺炎などの呼吸器症状を示す牛がいました。これらの牛の鼻汁から感染した疑いもあります。実際、牛群にマイコプラズマ性肺炎が蔓延した後にマイコプラズマ性乳房炎が発生した例が確認されています。

組合員の皆様も、「菌なしなのにおかしな乳房炎が続くな」とか、「治る菌と言われたのに悪くなる一方、変だな」などと感じたら、獣医師に相談してみてください。予防法は他の乳房炎と同じく搾乳衛生の徹底が基本です。大きな事故が起こる前に、もう一度基本に戻って搾乳手順を見直す機会にして頂ければ幸いです。

標茶支所西部家畜診療課 山本 康了